

# Gift for the Next 100 Years

Vol. 7

東日本大震災から1年、さまざまな準備を重ねて、ようやく初めてのキャンプを行うことができました。行き先は台湾。参加する子どもたちは両親を亡くしているため、パスポートの取得が大変なケースも考えられ、海外に出かけるのは大きな冒険でした。実際、参加できたのは10名でしたから、海外であることの障壁があったと考えることもできます。しかし結果として、新しい体験にあふれる台湾に行ったことは大正解でした。

ここではそのキャンプの様子を少しご紹介します。

## 📦 少しずつ緊張をほどく

あちこちから集まったキャンパーが全員顔をそろえたのは、成田空港に向かうスカイライナーの中でした。小学2年、3年の小さな女の子たちのグループは



両手いっぱいプレゼントをもらいました。

さっそくお化け(?)の話で盛り上がっていましたが、中高生の男子のグループも、女の子のグループもまだ会話はぎこちなく見えませんでした。台湾に到着後、バスに乗り換えて最初の目的地である東眼山<sup>とうがんざん</sup>へ向かいましたが、暗い山道がいつまでも続くようで、みなが疲れと不安を感じていたのではないかと思います。

東眼山に到着すると、台湾の方々の大歓迎が待っていました。びっくりするほどたくさんのプレゼントと食べ物に大喜びはしたものの、山の寒さも手伝って、緊張は十分にほどけないままに1日目を終えました。

2日目は、この上ない好天に恵まれました。日差しの下で体を動かすと汗ばむほどで、固くなっていた体も徐々にほぐれていきます。一晩いっしょに過ごしたことで、子どもたちとキャンプリーダーの関係も少し近づいたようです。



男子グループは山登り。山頂の展望台からは遠く台北の街が見えました。

暖かい日差しの中で、日本から行ったメンバーだけで集まって、自己紹介をし、歌をうたい、ゲームをして、キャンプの話を少ししました。1日目はほぼ移動でしたから、「やっとキャンプが始まった」という感じです。

そのあとは、台湾の方たちとともにグループごとにアクティビティを楽しみました。自然観察、ネイチャービンゴ、登山、伝統的デザインのプレスレットづくり、ネイチャークラフトなど、メンバーで何をするか話し合っ活動を楽しむうちに、メンバー間の関係はより近づいていったようです。会話も日に日に増えてゆき、3日目には「うるさい」と言っているいいレベルになっていました。その騒がしさに苦笑しながらも、「新しい体験」と「楽しい時間」という最初の目標は達成できたとの確信を持ちました。

## 📦 夜市・九份・小籠包

キャンプの後半は東眼山を離れ、台湾師範大学の宿舎を拠点に、台北市周辺で過ごしました。

台湾は町歩き楽しいところです。大学のすぐ近くにも師大夜市という、食べ物の屋台やアクセサリーの店などが並ぶにぎやかなエリアがあるので、3日目の夕食はグループごとに夜市でとることにしました。

楽しみ方は3グループそれぞれに異なります。男子たちのグループは、ひたすら食べ歩き。「台湾の食べ物、パねえ!」と絶賛していました。大きな女の子のグループは、買い物にかなりの時間を費やしたようです。そして、小さい女の子のグループはというと、夜市に行く前のかかなりの時間を大学内のライオンのオブジェで遊ぶことに費やしたそうです。「せっかくの台湾なのに…」と思うのは大人の理論なのでしょうね。これも立派な“このキャンプでなければできないこと”なのです。

4日目には、『千と千尋の神隠し』のモデルとなったといわれる街並みのある九份<sup>きゅうふん</sup>を訪ね、有名なレストランで小籠包を食べ、ちょっと前まで世界一高いビルだった台北101に上り、市場でおみやげを買うというように、一日を満喫しました。



夜市に直行のはずが、大学内の銅像でたっぷり遊びました。

# はじめてのキャンプ in 台湾

## ありがとう、またね!

台湾最後の夜には、にぎやかにさよならパーティを行いました。子どもたちには、どんなパーティになるかはナイショ。宿舎内の殺風景な部屋に集まって、「これがパーティ?」と思っているところに、台湾の学生ボランティアたちがピザやフライドチキン、炭酸飲料などを両手いっぱいを持って入ってきました。



台湾の学生さんたちとさよならパーティをしました。

みんなで乾杯をしてジャンクフードを楽しみ、いっしょに歌をうたい、キャンプの思い出話をして、プレゼントを交換しました。そして、「ありがとう、またね!」と言い合って別れました。

このプロジェクトでは、複数回のキャンプを継続的にやり、キャンプが“帰ってこられる場所”になればいいと思っています。台湾に再び来ることができるかどうかはわかりませんが、いっしょにキャンプを楽しんだ台湾の人たちと「またね!」と言い合えたことは、とても重要であるような気がします。

グリーンキャンプは、それぞれが経験した喪失とうまく折り合いをつけてこの先の人生を送るうえでの小さな支えとなるような存在を目指すものです。ですから、本当の意味でのキャンプの成果が見えるのは何年も先のこと、この子どもたちが大学生になったり、仕事に就いたり、あるいは家族を持ったりするときかもしれません。その場面のすべてを私たちが見届けることはできませんが、台湾最後の夜の「またね!」をいつまでも覚えていて、新婚旅行先に台湾を選んでくれたりしたらすてきな…と思っています。

## ここだと、もっと日本語が通じるね

成田空港に着き、入国審査に向かう通路でトイレに行った子どもたちを待っていると、最年少のえりかさん(仮名)が、とても穏やかな笑顔で近づいてきて、言いました。

「ここだと、もっと日本語が通じるね」

その言い方がおもしろくて、ちょっと笑ってしまったけれど、あとになって、これは彼女が新しい環境の中で一生懸命にがんばってきた証なのではないかと思いました。キャンプ中の彼女は、時々、わがままに振る舞うことがありました。保護者から「少しわがままなところがあるんですよ」と聞いていたので、「そのわがままが出たのかな」と思っていました。成田空港で見た笑顔は少し印象が異なるものでした。



日本に着いて、みんなちょっとホッとした表情です。

これはあくまでも想像に過ぎませんが、彼女のわがままは、ちょっと無理してがんばったときに生じる自然な反応なのではないかという気がします。だから日本に着いて、緊張がほぐれ、素の部分が顔を出したのではないのでしょうか。キャンプの中で、そして震災後の新しい生活の中での彼女のがんばりを思い、思いっきりほめてあげたい気持ちになりました。またそれと同時に、日常生活の中で彼女のありのままを受け入れておられる保護者に対して、強い敬意を感じました。

今回のキャンプはまだ、「これが私たちのグリーンキャンプです」と胸を張って言えるような特別なものではありません。これからたくさん学びを積み重ね、試行錯誤を繰り返すことになります。えりかさんに対する私の想像は的外れなものかもしれませんが、このキャンプのスタッフはみな、キャンパー一人ひとりの言動に注意を払い、彼らの置かれた状況に思いを馳せ、どのように対応すればよいかと考えながら5日間を過ごしました。どこまでいけば「これが私たちのグリーンキャンプです」と胸を張って言えるのだろうかと思うと気が遠くなるようですが、「こうした積み重ねがあれば大丈夫」と妙な自信があるのも事実です。

今回のキャンプはグループリーダー、プログラムリーダー、スーパーバイザー、キャンプディレクターなどが、個々の役割をきちんと果たすことで無事終えることができました。キャンパーの「楽しかった!」「また参加したい!」という感想を読みながら、組織キャンプのよさを大切にしていけば、きっとよいグリーンキャンプを作り上げることができるに違いないと思っています。